

言語の進化史



ヒトは音声による言葉と共に、手話と、それから脳内言語を活用します。音声による言葉と視覚を利用した手話は、コミュニケーションの仕組みとして全く同じものです。ただ聴覚情報が視覚情報が違うのです。ここでは音声による言語のことを考えましょう。

「バ」「ナ」「ナ」と聞こえてきたとしましょう。日本語が分からない人には、ただの音の羅列かもしれない。

ひとばく 研究員 だより

主任研究員 三谷雅純さん

ません。しかし日本語に慣れた人なら、「バナナ」と聞くと黄色く甘く細長い果物を思い浮かべるでしょう。イメージが浮かびます。浮かんだイメージから、食べた時の味や香りまでがよみがえります。音に込められた象徴性があるからです。そしてその象徴性は「言葉」を理解することに結びつきます。例えば「ムサ」（ラテン語）や「ピサン」（イ

ンドネシア語）もバナナの意味ですが、ラテン語やインドネシア語を知らなければ何のイメージも湧きません。ここからは進化の話です。ヒトは直立した時から、のどや舌が自由に使えるようになりました。「あ」「い」「う」「え」「お」と発音できるようになりました。ただし自由に発音できるからといって、それだけで象



チンパンジー（京都大学霊長類研究所のアイ）の描いた絵



ヒトの子ども（3歳男児）が描いた絵「お母さんにお口の中の虫歯を見てもらっている怪獣」

種により異なる象徴性

徴性、つまりイメージを思い浮かべる能力が宿った訳ではありません。それでは「イメージを思い浮かべる能力」とはどんな力なのでしょう？

人と自然の博物館には、チンパンジーの描いた絵が（こっそりと）飾ってあります（どこにあるでしょうか？）。緑や黒の真ん中あたりにピンク色の何かが描いてあります。チンパンジーは絵を描くことが大好きですが、人間はどんな人が見ても何を書いたのかは分かりません。人の幼児が描いたのなら、何を描いたのかは直感的に分かります。図の2枚の絵を見てください。これがチンパンジーとヒトという2種の象徴性の差なのです。ヒトならばどの人を取っても、その象徴性は共通なのです。そのために絵や言葉も互いに分かるのです。

ヒトの象徴性の発達には、行動のいろいろな場面で見られます。赤ちゃんの成長がその典型です。お母さんはご自分の赤ちゃんのことをよく観察してみてください。きっと典型的な象徴性が見つかりますよ。